



潮目
結界

IWAKI LEYLINE

SHIOME

KEKKAI



文
座
×
縄
磐

IWAKI LEYLINE

J O M O N

I W A K U R A



(二社)いわき観光まちづくりビューロー

〒972-8321 福島県いわき市常磐湯本町向田3-1-1 いわき市石炭・化石館内
TEL: 0246-446545 FAX: 0246-446546

(二社)いわき観光まちづくりビューロー

〒972-8321 福島県いわき市常磐湯本町向田3-1 いわき市石炭・化石館内
TEL: 0246-446545 FAX: 0246-446546

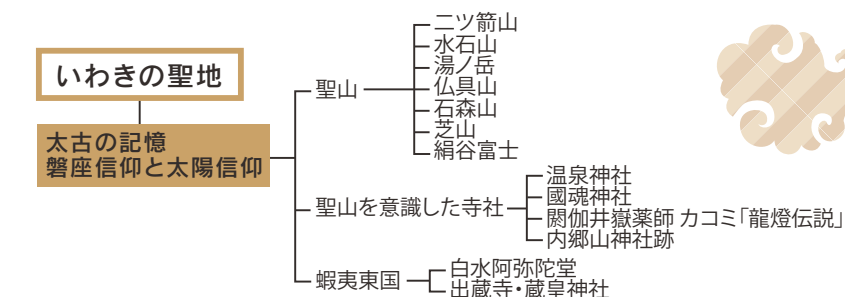
JOMON

IWAKURA

絹谷富士山からの眺望（湯ノ岳方面）

太古の記憶 太陽信仰と磐座信仰

太古、人々は、すべての生命の源である太陽を崇め、その動きを観察できる丘を聖地としました。さらに、自然を司る神々は巨岩に降臨すると考え、それを磐座（いわくら）と呼んで、これも重要な聖地としました。いわきの太平洋沿岸部は、かつて岬や島だった岩盤の丘陵が点在し、阿武隈高地に連なる岩稜が平地を縁取っています。「いわき=磐城」という地名は、その名自体が太陽信仰と磐座に神々が降臨する土地であることを意味しているのかもしれません。



表紙の写真
「中田横穴」 いわき市平沼ノ内字中田

平沼ノ内にある横穴墓群で、6世紀頃のものだと推定されている。1号横穴には、特徴的な赤色と白色の三角連続文が描かれ、床面は全体に赤色彩色が施されている。こうした装飾古墳は九州に多く、東北では40例ほどが確認されている。古代の文化交流を物語るものといえる。

聖山

里の聖地と結びついて、古より人々の生活を見守ってきた

いわきの平野を見下ろすたおやかな峰々は



いわき市小川町上小川地内

二ツ箭山

futatsuyasan

修験道

二ツ箭山の「箭」とは矢竹のことで、男体山と女体山、二つの岩峰が矢竹を立てたように天に突き上げる様子から名付けられました。それは、古代の人たちにとっては神が降臨する磐座であり、また、天と地を結ぶアンテナのようなものとも考えられ、修験道の行場とされてきました。登山道の途中には、冬至や夏至の朝日が射し込む岩の隙間があったり、山伏たちが籠もって修行した岩棚や磐座を祀った祠などがあり、岩を攀じりながら登るうち、いつしか無心となり、山伏たちと同じように、自然と一体となる境地を味わうことができます。



岩場が続く二ツ箭山は、修験道の修行場の痕跡が色濃い。登山道のバリエーションが豊富なのもその名残りで、沢沿いのコースには滝行の場もある。遥か海まで展望できる岩上に立てば、経を唱える山伏の音が響くようだ。



いわき市三和町合戸地内



上) 水石山の名の由来となった水石。これに磁力計を近づけると300 μ T(マイクロテスラ)あまりの強磁場を示す。通常が40~50 μ T程度だから、水石は6倍近い磁性を帯びていることになる。こうした強い磁気は、人の側頭葉を刺激して幻覚を呼び起こすという研究もある。

下) 水石への入口にも信仰の場所であることを示す鳥居がある。

水石山

mizuishiyama

磐座
太陽信仰

関伽井嶽に連なる水石山は古くから雨乞いの山として知られています。名前の由来となった「水石」は、山頂近くに円錐形の姿を露頭させ、これをご神体として祠が祀られています。この岩の電磁波を測定すると、強い磁性を帯びているのがわかりますが、それは、全国にある雨乞いの石で見られる現象です。強磁場は蛇が好むともいわれ、実際、水石の近くでは蛇の姿をよく見ます。蛇は龍に繋がり、龍は水神として崇められ、また恐れられてもきましたが、それは、こうした蛇の生物学的な特性に由来するのかもしれない。

湯ノ岳

yunodake

山岳信仰
火山信仰

仏具山、石森山とともに「いわき三大霊山」に数えられる聖山で、湯ノ岳伝説では、平安時代初期の高僧徳一大師が、この三山を観世音菩薩がいる補陀落浄土と考え、観音堂を配置したとされます。麓の湯本にある温泉神社も、かつてはその頂上付近にあったほか、この山を仰ぐ寺社の多くが聖山として意識し、二至二分の方向に湯ノ岳を拝するような構造になっています。温泉もまた古代から聖地の要件の一つでしたが、山上他界を意識させるその山容とともに温泉の源である湯ノ岳は、文字通りいわき一の聖山といえます。



いわき市常磐藤原町地内

上) いわきの盟主と呼ぶにふさわしい雄大な山容の湯ノ岳、その頂上からは、いわきの市街からその先の太平洋まで、さらに目を転じれば、湯ノ岳に連なる山並みを一望できる。

左) 温泉神社から見ると、旧社地があった湯ノ岳方向は、夏至の入日の方向に当たる。湯ノ岳から温泉神社の方向は冬至の日の出の方向になる。一年のサイクルを表すと同時に、太陽の永遠性を意識したものだろう。



いわき市田人町南大平地内

いわき三大霊山は、平野部の西側にほぼ一直線に並んでいる。さらに、他の主要な聖山である関伽井嶽、御斎所山、滝富士をプロットして結ぶと、図のような位置関係になる。ちょうど、市街地を守る屏風のような形を成し、さらに冬至の日の出方向(南東の海の方

仏具山

butsugusan

いわき市南部から見ると、瘤のようなピークを連ねた特徴的な山容が目につく。仏具山には、弘法大師空海がこの山に仏具を納めたという伝説があります。また、空海と同時代の人で仏教教理上のライバルともいえる徳一大師がここに観音堂を開いたとも伝えられ、この山が特別な存在であったことがうかがえます。仏具山観音堂はいわき三大霊山観音の一つでもあり同時に、徳一大師由来の結界とも考えられる「菊多七観音(余木田観音を加えて八つの観音で数えられることもある)」を構成する聖地の一つでもあります。仏具だけでなく、何か大きな力の源がこの山には眠っているのかもしれない。



石森山

ishimoriyama

磐座
太陽信仰

いわき市平市街の北に位置する石森山は、2000万年前の海底火山噴火によって形作られた山塊の一部です。聖山とされる山には火山も多く含まれますが、石森山も太古の大地の脈動を感じさせます。海に近い場所なので、山頂からは一年を通じて太陽を追うことができ、また平野を挟んで西に連なるいわきの外輪山ともいえる聖山を一望できます。頂上には石森権現が祀られていますが、その祠は東を向いて春分・秋分の朝日を迎え入れると同時に、関伽井嶽薬師常福寺を背後にして、その光を真っ直ぐに導き入れるような構造になっています。

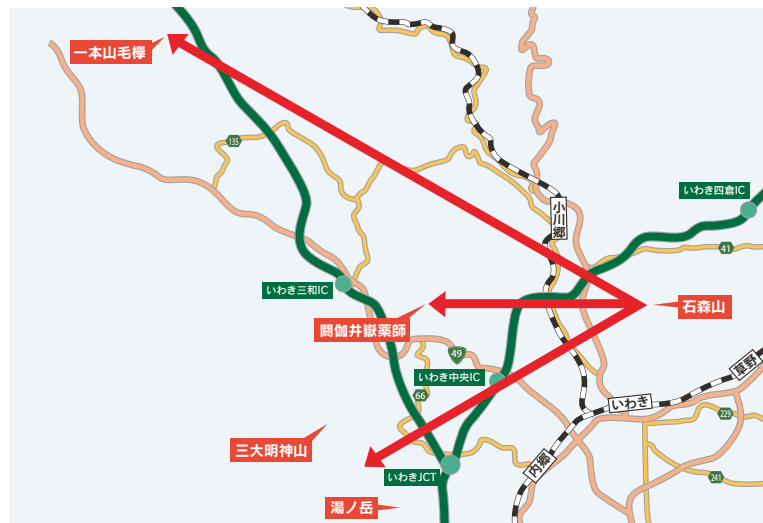
地図で見ると、石森山と関伽井嶽がぴったり東西に並んでいるのが確認できる。さらにこの山頂からは夏至の入日の方向に一本山毛櫨(いっぽんぶな)と呼ばれる巨岩が位置し、湯ノ岳と三大明神山の鞍部に冬至の入日が沈む形となる。土地が秘めた太古の火山の記憶とともに太陽信仰にも関わりが深いことが想像できる。



いわき市三和町差塩地内



いわき市平四ツ波石森地内



いわき市三和町上三坂水田地内

芝山

shibayama

磐座
太陽信仰

いわき市、平田村、古殿町の境界に位置する芝山は、内陸にありながら360度の展望が開けるビューポイントです。山影をランドマークとして二至二分の太陽の出没位置を合わせることを「山当て」といいますが、芝山は山当てをするのにもってこいの場所です。こうした場所も聖地とされるケースが多いのですが、芝山もまさに太陽信仰の聖地とされていたのでしょう。地元では、芝山はその内部が大きな空洞になっていると伝えられています。実際に広い芝原の山頂の一角では、飛び跳ねると、太鼓を叩いたような鈍い音と響きを感じられます。



いわき市平四ツ波石森地内

絹谷富士

kinuyafuji

石森山の北方にあって同じ山塊を形成する絹谷富士は、山頂部一帯がむき出しの岩肌で、太古の火山活動をリアルに感じることができます。この山頂も遮るもののない360度の眺望が開け、いわきの聖山のほぼ全てを見渡すことができます。露出した岩盤で磁力を測ると、ところどころ強い磁性を帯びているので、ここでも水石山と同様に雨乞いの祭祀などが行われていたかもしれません。石森山山頂と並んでいますので、春分と秋分の日には、関伽井嶽の背後に沈む夕陽を見届けることができます。



いわき市常磐湯本町三函322



上) 神社の社殿は南向きが普通だが、温泉神社の社殿は北東を向く。本殿背後には、湯ノ岳から巨石を運び祀られた「むすび磐境(いわさか)」と呼ばれる磐座の配石があり、磐座信仰も示している。



温泉神社

onsenjinja

磐座
太陽信仰

温泉神社の創建年代は不明で、当初は、いわき第一の聖山である湯ノ岳の頂上近くにあったとされます。天武天皇二年(白鳳二年、673)に、現社地の北にある観音山の中ほどに遷座し、さらに現在地に移ったと伝えられています。通称は湯泉様(ゆぜんさま)、また、佐波古神社とも称され、後述の延喜式内磐城七社の一つに数えられます。温泉神社から見ると、旧地である湯ノ岳は夏至の入日方向にあたり、古い太陽信仰を示しています。また、温泉神社の社殿は、大半の神社の社殿が南を向くのに対して、北東に面しています。その方向には、飯野八幡宮、その先に石森山が位置し、ある種の結界を形作っているように見えます。

国魂神社・田神社

kunitamajinja & tainja

山の神
田の神

大同元年(806)の創建で、いわき最古の神社の一つに数えられる国魂神社。その境内の北には田神社があり、国魂の神に捧げる神饌として米が育てられます。春、山の神はイワナに背に乗って里へと下り、田の端にある桜の樹に宿って田の神となります。そして稲穂が垂れて米が収穫できるまで見守ります。田神社は、境内の神田と桜によって、そんな山の神・田の神の信仰をそのまま描き出しています。田神社を見下ろす丘の上には道了神社があります。田の神は、いったんこの道了神社に宿り、どぶろく祭りの前日に田神社へお迎えします。



いわき市勿来町窪田馬場72(田神社)



祭神は大己貴命、少彦名命、須勢理姫の三神。広い境内の中には福稻荷神社、菊田神社、田神社の摂社がある。窪田山守平昌清の代に、この地を窪田とし、窪田の郷社として集められ、その後も佐竹氏、棚倉藩主の尊崇を受けた。田神社の社殿脇に植えられているのは山桜や姫桜。神田で育てられた稲は秋に刈り取られ、その米で祭神に捧げるとどぶろくが醸され「どぶろく祭り」が行われる。

関伽井嶽薬師常福寺

akaidakeyakushijofukuji

薬師堂の正面、東に向かって真っ直ぐに伸びる参道は、春分・秋分の朝日が昇る方向を指しています。お彼岸の中日でもあるこの日に昇った太陽の光は、参道に導かれ、本尊薬師如来を照らし出します。これは東方浄瑠璃浄土の主である薬師如来の由来を表すと同時に、彼岸にこの世と浄土を取り結ぶ意味があります。太古から雨乞いの祭祀が行われた水石山に連なる関伽井嶽は、水石山と同様に水の聖地でもあり、また燕石(つばくろいし)が磐座信仰を伝えています。古くは修験者たちが集う道場の中心でもありました。海沿いにある波立寺では、夏祭りの際に、最



後の奉納場所がこの常福寺となっていて、次の項で紹介する龍燈伝説の遡上ルートを連想させます。常福寺に夏祭りの奉納を行う寺社がいわき市内には多く、ここが古くから山岳異界的な信仰の聖地であったことを物語っています。



いわき市平赤井嶽1

龍燈伝説

常福寺の境内東の林の中には、巨大な龍燈杉があります。これは龍燈伝説にかかわりがあります。夏井川河口の太平洋上に、無数の蛍火のようなものが現れ、それが川を遡って



龍燈杉まで延々と続くというもので、江戸時代中期には、龍燈見物に多くの人が訪れたと伝えられています。三和町差塩(さいそ)には、女川の独国和尚が開いたと伝えられる三十三観音がありますが、女川にも独国和尚ゆかりの三十三観音があり、その入口に

は「龍燈の松」と呼ばれる松がありました。その松は、独国和尚が女川に帰郷する数日前になると、窪みの部分に火が灯り、それに因んで龍燈の松と呼ばれたといわれます。他にも富山県の立山や四国、九州などに龍燈伝説は散見されますが、今ではどこも龍燈を見ることはできず、またそのメカニズムもわかっていません。龍燈の中でももっとも見ごたえがあったといういわきの龍燈を復活させてみたいですね。



いわき市三和町差塩館下地内

差塩三十三観音

saisosanjusankannon

西国三十三観音を模した霊場・良々堂山(ややどうさん)。約190年前、独国和尚が岩屋の中に堂を設け延命地藏を祀ったことからこの地が霊山とされました。独国和尚の弟子の無涯が西国三十三観音の堂下の土砂を持ち帰り、巨岩の下に埋め、文政四年(1821年)に良々堂山三十三観音霊場が建立されました。今でも、尾根を登り、松林や杉林を通り抜けて三十三ヵ所の観音像を巡ることができます。西国の本尊に模した石像や堂屋の平べったい大きな石上の十六羅漢などは土地の信者が寄進したもので、他に独国和尚の座禅像を彫った碑や由緒を刻んだ碑もあります。

太古の磐座信仰や太陽信仰は蝦夷・東国へと引き継がれ、
大和朝廷と東国が接触する、ここ、いわきの地で、
その痕跡とともに、文化が受け継がれた



いわき市内郷白水町広畑221

国宝白水阿弥陀堂

national treasure shiramizu amida temple

福島県内唯一の国宝建造物である白水阿弥陀堂は、平安時代末期に建立されました。堂は、方三間単層宝造り柿葺で、院政期につくられた仏教建築であり、現存するとても貴重な建造物です。堂内には、阿弥陀三尊、持国・多聞天王が安置されています。さらに、堂境域は、平安末期の寺の境域と遺跡が確認されたため、昭和41年に国史跡指定、昭和47年から阿弥陀堂の周囲に浄土庭園が復元され、院内外の境に「大門跡」、院外には、本坊願成寺「中の坊跡」「小御堂跡」があります。7月初旬から8月中旬には古代ハスが開花し、背後の経塚山を主とした山々が四季の移ろいを誘い、わが国の十二世紀を代表する平泉の毛越寺庭園・観自在王院、京都宇治平等院などとともに、建造物と庭園が創建当初の姿を完備しているものは希少です。



阿弥陀堂と高野山の間を横切る古い街道は、夏至の朝日と冬至の夕陽を結ぶ方向に伸びている。そして、ちょうど阿弥陀堂の前に「入山」の地名が並ぶ。これは、冬至の夕陽が山に没するのを意味していたのだろう。ちなみに夏至の日の出方向には内郷山神社がある。



内郷山神社跡

uchigosanjinjaato



江戸時代末期に石炭が発見され、昭和40年代まで、日本の工業化を支えた常磐炭鉱。その山の恵みに感謝し、採炭の安全を願って、山神社が広い炭田のあちこちに祀られました。その中心だったのが内郷山神社です。境内には地鎮の儀式である相撲を奉納する土俵も造設されていました。かつて鳥居があった場所からは、湯ノ岳と高倉山が遠望でき、ちょうどその山間に冬至の日が沈む光景が見られました。このラインは白水阿弥陀堂前を通る街道に一致しており、この街道沿いには炭鉱住宅が並んでいました。冬至は太陽の再生と生命の循環を表すことから、常磐炭砦の繁栄と安全の祈願が、この構造に込められていたことがわかります。

いわき市内郷内町前田地内(現 内町公園内)



出蔵寺

shutsuzoji

福島四国霊場第十三番霊場。その横に、磐城三十三所観音第十番札所の観音堂があり、千手観音が祀られている。また、背後には蔵皇(ざおう)神社があって、怒髪天を衝く不動明王が立っており、神仏習合の色を濃く残しています。



いわき市勿来町酒井出蔵141

蔵皇神社

zaojinja

ここに蔵皇権現が祀られて修験道の聖地になる以前は、山全体がいわきにおける蝦夷の一大拠点でした。修験道は様々な信仰を取り込んで成立した古来の信仰です。そこには、縄文時代から蝦夷へと受け継がれた自然信仰も含まれているでしょう。そうした背景を考えると、この場所に今でも息づく蝦夷=東北の息吹が感じられます。



いわき市勿来町酒井出蔵142

聖地を糸口 いわきを知る

このパンフレットは、「聖地」という観点からいわきを見渡し、その歴史と文化を見直そうという趣旨で作られました。

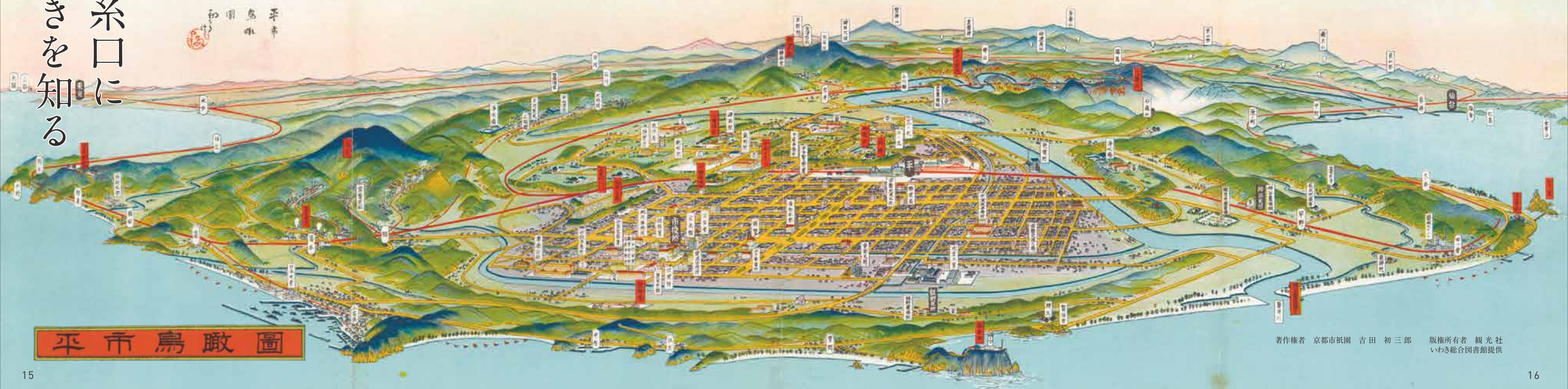
製作にあたっては、(株)TBSビジョン、聖地研究家の内田一成氏をはじめ、市内の歴史家の皆様や関係施設様にご協力をいただき、三年余りをかけて100ヶ所以上の現地調査を行い、さらに文献等の資料調査を行った結果をもとに、とくに象徴的な物件やエピソードを紹介したものです。これはほんの一部であり調査対象もまだまだ埋もれています。

このパンフレットをガイドとして、紹介した聖地を実際に巡り、いわきという土地の性質、歴史と文化を体感し、さらに深いいわきを知るための糸口となれば幸いです。



内田 一成 (聖地研究家)

GPS・位置情報データ、地学データなどを応用したフィールドワークと歴史・文化研究を組み合わせ、聖地に秘められた意味を読み解く「レイラインハンティング」の第一人者。現在、各地で聖地調査とそれに基づく観光プランなどの提案を行っている。



著作権者 京都市祇園 吉田 初三郎

版権所有者 観光社
いわき総合図書館提供



袋中上人と専称寺

taichushonin & senshoji

いわき生まれの袋中上人は、明で仏教の奥義を学ぼうと決し、渡明船を求めて琉球に渡ります。しかし、船は見つからず、そのまま琉球に留まり、中山王に請われて琉球の仏教普及に尽くしました。江戸時代初期にすでに世界を見渡していた袋中のスケールの大きさは、まさに潮目の土地の生まれであることを象徴しています。その袋中が学んだ専称寺は、浄土宗名越派の総本山として栄えましたが、その後途絶えてしまいます。しかし、近年復興され、もうすぐ新しい姿で蘇ります。丘陵上にある専称寺の本堂と参道は夏至の日の出と正対していますが、これは、この丘の上が縄文の太陽信仰の祭祀場であった記憶を伝えるものでしょう。



専称寺 いわき市平山崎字梅福山5

長く無住で荒廃していた専称寺は、東日本大震災で半壊した。しかし、その後、復興工事が進み、かつての浄土宗名越派の総本山としての風格を取り戻しつつある。袋中縁の寺院は専称寺の他に、能満寺、如来寺、菩提院が市内にある。いずれも格式ある名刹だ。



能満寺 いわき市常磐西郷町忠多385



如来寺 いわき市平山崎字矢ノ目92



菩提院 いわき市平字古鍛冶町59

住吉神社

sumiyoshijinja

磐座

神社の起源は自然崇拜時代における磐境(いわさか)や神籬(ひもろぎ)といわれます。この住吉神社の背後には海食の跡の残る岩山があり、これが磐境・神籬に相当します。この岩山は、古代において船で旅するもの、漁で生活する人々にとって灯台と同じような役割を果たし、生活を守る大切な存在でありました。やがて岩山は神格山され、その麓にお社が祀られるようになったと言われています。また、時のお大臣(おおおみ)が勅命を奉じて東北地方を巡視のおり、この住吉が陸と海の要害の地であり、東北の関門にあたるので、武内宿弥により航海安全と国家鎮護のため東北総鎮守として祀られました。平安時代には既に現在の場所に社殿を有し、移転することもなく今日に至っており、延喜式神名帳には全国住吉七社の一社にも数えられ、東国では唯一の式内住吉神社です。



いわき市小名浜住吉字住吉1



東に伸びる参道の先からは、春分と秋分の朝日がまっすぐ鳥居に向かって伸びてくる。住吉神社の背後の岩山は、神社のご神体山である。その東端の中腹には、この地もまた同様に湯殿山の石碑がある。海

蝕された岩肌は、荒々しく、厳かで、地元の人々に自然に畏れの気持ちを抱かせただろう。現在も地元において出羽三山の先達による講が組まれ、出羽三山登拝が行われている。





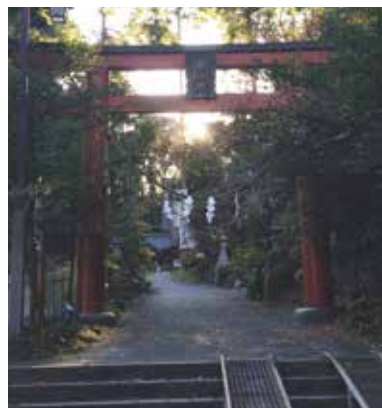
いわき市常磐関船町諏訪下6-3

金刀比羅神社

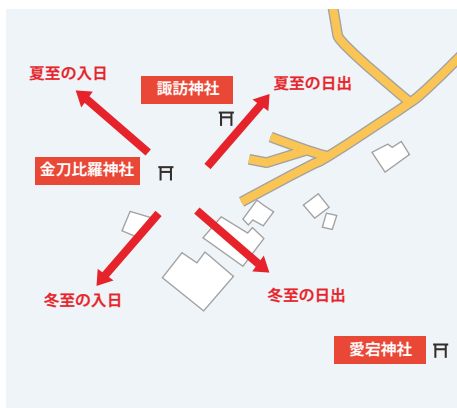
kotohirajinja

修験道

金毘羅信仰は、琴平山の山岳信仰と修験道が習合して生まれた「金毘羅大権現」を祭神とするもので、金毘羅さんを信仰した瀬戸内の塩飽(しあく)水軍が廻船業に携わり、全国に広めました。この金刀比羅神社は、永正二年(1505)に、威實院弘栄が讃岐の金毘羅大権現の分霊を勧請したもので、造営後に海難事故が激減し、まさに潮目の土地の守護神として崇敬を集めてきました。金刀比羅神社が立地する場所は、周囲を小高い丘に囲まれて、前面が開けた地形ですが、これは古い聖地の立地に共通するもので、元々、はるか古代にまで遡る聖地だったのでしょう。



金刀比羅神社の社殿は、冬至の日の出方向を正面に、背後は夏至の入日、摂社の諏訪神社の方向は夏至の日の出、反対は冬至の入日方向に、正確に向けられている。通常の神社は北を背にして南面するが、この金刀比羅神社のような構造は、縄文時代の祭祀遺跡の記憶を留める神社に多い。



1月10日の例大祭ではいわきだるまや熊手など縁起物が並ぶ

波立寺

haryuji

太陽信仰
浄土思想

波立寺(波立薬師)は、大同元年(806)徳一大師が海上鎮護を念じて創建されたと伝えられています。関伽井嶽薬師、八茎薬師とともにいわき三大薬師の一つに数えられ、薬師如来の住まうとされる東方浄瑠璃浄土の方位(東)を正確に向いているのは、関伽井嶽薬師と共通です。すぐ前方の波立海岸は、正月のご来光の名所として知られますが、波立寺の参道が、岬と弁天島の間を向き、ここから春分と秋分の太陽が昇るので、本来は春と秋の彼岸(春分と秋分)に、本堂へと導かれるご来光を拝するのが正式な姿だったでしょう。山門から本堂へ向かって、春分秋分の朝日が導かれる光景を目の当たりにすると、古の人たちが彼岸の日にあの世とこの世を繋ぐ意識を持って眺めていたことが感じられます。



いわき市久之浜町田之綱字横内89

立錡鹿島神社

tatehokokashimajinja

縄文

「立錡」の名は、鹿島神宮の祭神である武甕槌神(たけみかづちのかみ)が東北を平定するためにこの地に至り、「塩千山」と呼ばれていた岩山に錡を立て、これから進む方向を眺望したことに由来すると伝えられています。



さらに、大同二年(807)、この地に魍魎(もうりょう)が現れ、当時の神職であった神職藤原朝臣信次が、辻に「錡」を立て退治したとも伝えられております。今は、巨

岩を隣にして社が鎮座していますが、かつては岩の上に祠があり、海の彼方にある故地(鹿島神宮)を指していたとも考えられます。古代史の観点から見れば、鹿島神宮が大和朝廷による東国進出の基地のような位置づけでしたから、その前哨基地という性格も併せ持っていたと考えられます。



いわき市平中神谷立錡33

磐城式内七社

iwakishikinainanasha



【延喜式と式内社】

由緒のある神社で、「式内社」とうたっている神社があります。この「式内社」は「延喜式」に由来します。延喜式は、養老律令（ようろうりつりょう）の施行細則を集大成した法典で、平安時代の延長5年（927）に完成し、康保4年（967）に施行されました。全50巻からなり、内容は当時の社会生活全般に及ぶものです。神社に関しては9・10巻にまとめられており、この部分は「延喜式神名帳」（えんぎしきじんみょうちょう）ともいわれます。神名帳には全国の神社が国郡ごとにあげられ、祭儀などについても記されているので、古代の社の様子や神祇信仰の実態がわかります。他の巻においても各地の特産物、手工業製品などが記されるなど百科全書的な性格をもち、日本の古代を知るための重要な史料となっています。「延喜式神名帳」に記された神社は延喜式内社（えんぎしきないしゃ）、略して式内社もしくは式社とも呼ばれ、国より幣帛（へいはく）を受けていましたが、この制度は廃れました。中世末からは式内社は神社の格式のひとつとして認められるようになり、それが現代にまで続いているのです。

【磐城七社】

「延喜式神名帳」に名前があげられているいわきの式内社は七社あります。磐城七社は、延喜式の時代から中世を経る間に廃絶された社もありましたが、現在は、大國魂神社（平菅波）、二俣神社（小川下小川）、温泉神社（常磐湯本）、佐麻久嶺神社（平中山）、住吉神社（小名浜住吉）、鹿島神社（常磐上矢田）、子鉤倉神社（平揚土）として定めております。



大國魂神社

いわき市平菅波字宮前54

磐城七社の一つ、神名帳では磐城七社の筆頭にあげられる。主祭神は大国主命（おおくにぬしのみこと）こと大己貴神（おおなむちのかみ）。創建年は未詳だが、周辺に甲塚古墳や推定樹齢1000年の大杉があることから、歴史の古さがうかがえる。同社に伝わる国魂文書は中世磐城の様子を知ることができる一級史料であり、県指定重要文化財。現在の社殿は江戸時代の延宝8年（1679）の建立で市指定有形文化財。



二俣神社

いわき市小川町下小川字梅ノ作53-1

磐城七社の一つ。神名帳には記載があったが、中世の間に廃絶。磐城平藩主内藤義概（よしむね）の調査のさいに、下小川村を流れる夏井川あたりにある二又八幡宮を「其辺りの河水二又に分かれて流るるを以て二俣の神號は起りしならん（その辺りで夏井川が二又に分かれて流れているのを以て、二俣という神号は起こった）」という理由で、二俣神社の遺跡と同定している。



温泉神社

いわき市常磐湯本町三画322

磐城七社の一つ。「ゆのじんじや」、「ゆぜんさま」とも呼ばれる。祭神は大己貴命（おおなむちのみこと）と少彦名命（すくなひこなのみこと）、事代主命（ことしろぬしのみこと）。湯ノ岳を神体山とする。社伝によると上古は湯ノ岳山頂に鎮座し、中世には観音山、江戸時代の明和5年（1768）には現在地へ遷宮している。本殿は元禄8年（1695）に内藤家により造営され、現在、市指定有形文化財。



鹿島神社

いわき市常磐上矢田町花木下34

磐城七社の一つ、鹿島神宮の分社。祭神は武甕槌大神（たけみかづちのおおかみ）。日本神話の「国譲り」に登場する神で、出雲の建御名方命（たけみなかたのみこと＝諏訪大社の祭神）を下したことから、古来、武神として信仰される。磐城でも古代より信仰され、「日本三代実録」によると菊多郡に一社、磐城郡に十一社の分社が認められる。本社はそのなかから「只其一社のみ」磐城七社に加えられている。



佐麻久嶺神社

いわき市平中山字宮下81

磐城七社の一つ。祭神は五十猛命（いそたけらのみこと）。須佐之男命（すさのおのみこと）の御子で別の名を大屋毘古命（おおやびこのかみ）と云い「事始めの神」として信仰されている。室町時代、当時の村主が戦争にまきこまれ、旧記や神領等をことごとく失ったので、一時、矢田村に居を移し神を勧請して、この場所に郷民が社を建てた。ところが、神霊は旧社を慕って毎夜中山の嶺に光を放つので村主がその噂を嫌がり、社を取壊してしまった。その後、旧地に社を遷したが、1682年3月、雷火にあって焼失したので平城主内藤義泰が翌年8月に再建し、山林一町歩を寄進して祭祀に供し、現在に至る。境内には、市内最古と言われる大杉や、ケヤキ・ヒノキなどの何本もの御神木がある。



住吉神社

いわき市小名浜住吉字住吉1

磐城七社の一つ。平安時代には既に現在の場所に社殿を有し、それから移転することもなく今日に至った神社です。全国に住吉神社は多くありますが、全国住吉七社の一社に数えられ、各地の住吉神社同様、海上交通の神として信仰される。10月には古式に即した祭礼として勅使参向式と流鏝馬がおこなわれており、流鏝馬神事は市内に残る数少ない流鏝馬である。



子鉤倉神社

いわき市平揚土30

磐城七社の一つ。神名帳には記載があったが、中世の間に廃絶。磐城平藩主内藤義概の調査において桜町に「稲荷の小社残り、往歳其辺りより勾玉を出せることあらば古蹟たること疑ひなし」（桜町には稲荷神社の小社が残っていた、往年には其のあたりより勾玉も出土したことがあったので、これは子鉤倉神社社の古跡であることは疑いない）と同定し、復興に際して現在の揚土に社殿を造営している。



言い伝えられている七観音は渦巻き状に配置されていたと考えられ、その中心には星の宮神社がある。ここには、虚空蔵菩薩が神像として祀られる。虚空蔵菩薩は金星の化身ともされるので、星の宮の名の由来はそこにありそうだ。隣接して鬼越神社が鎮座するが、ここは安倍貞任が文殊菩薩を祀ったことに由来すると伝えられている。朝廷に敵対した貞任を祀るから「鬼」であり、この地が「鬼」の聖地であったことを暗示している。徳一は坂上田村麻呂と連携していたとも伝えられているが、そんな観点から見ると、七観音が結界を構成しているようにも見える。



徳一と七観音

tokuitsu & nanakannon

徳一(とくいつ)は、平安時代初めの僧で、奈良の興福寺・東大寺で法相宗を学びました。20代の頃東国に移り、以後常陸、会津を中心に活動し「徳一菩薩」と称されました。会津の慧日寺時代に最澄・空海と論争し、特に最澄と行った三一権実諍論は、仏教史上に残る教学論争として有名です。会津の慧日寺、勝常寺、筑波山の中禅寺など福島、茨城両県を中心に徳一開創とされる寺院は90ヶ寺以上にのぼり、いわきでは20ヶ寺あまりに徳一開創の伝承があります。この徳一開創伝承はいわきの寺院の特徴の一つともいえます。徳一が造仏したとの伝説がある七観音は、江戸時代初期の寛文年間(1661～1673)に書かれた「磐城風土記」には「有観音、徳溢於高蔵、井上、大島、小川、出倉、奈古曾、仏具山刻一木造七観音」(観音あり、徳一が高蔵、井上、大島、小川、出倉、奈古曾、仏具山に於いて一木を刻んで七観音を造仏した)とあります。ここから江戸時代のはじめには徳一が一木から七観音を造仏したとの言い伝えが成立し、七観音は高蔵寺の高倉観音堂などで祀られていることが分かります。七観音は江戸時代後期の文政年間(1818～1831)にまとめられた「磐城志」には、「菊多七観音」と記されています。しかし、この史料に挙げられているのは高倉観音、丈六観音、関田観音、仏具観音、出蔵観音の五観音だけで、残りの二観音は、おそらく江戸時代のうちに失われたものと思われる。また、菊田七観音は八つの観音を数えるという説もあります。それは、法田寺の仏像を彫った時に、その余った木で、もう一体の観音を彫り、それを余木田観音として堂を作って祀り、その一体も七観音に数えるというものです。位置づけとしては、法田観音と対になって、これを一体と数えるのでしょう。



富沢観音

いわき市川部町富沢地内

観音堂の管理は、現在、区となっているが、元は別当寺として長楽寺が管理していた。同寺は泉藩の廃仏毀釈により廃寺となり現在に至る。以前は千手観音をお祀りしていたが、幕末の嘉永三年(1850)ごろに現在の聖観音をお祀りするようになったと思われる。



仏具山観音

いわき市山玉町竹縄地内

仏具山観音堂は徳一による開基とされる。観音堂には徳一自らが一本の木から像仏したとされる4体目の観音をお祀りしている。また、関伽井嶽や八茎薬師など磐城の霊山には徳一に関わる伝説がある。その中で仏具山にも徳一にまつわる伝説も伝わっている。



法田観音

いわき市山田町仁井谷地内

徳一により大同年間に建立と伝わるが詳細は不明。法田観音は徳一が像仏した2体目の観音と伝わる。高さ5メートルを超える大きさの千手観音で、丈六観音と称され、江戸時代には7月17日に縁日がたった。観音堂は享保五年(1720)頃の建立と考えられる。



出蔵観音

いわき市勿来町酒井出蔵地内

大同二年(807)に徳一が千手観音を祀った観音堂と出蔵寺を建立したと伝わるが、詳細は不明。出蔵寺自体は江戸時代後期の寛政年間に再興され、本堂もその時建立されたものと思われる。観音は千手観音で徳一が像仏した5体目の観音と伝わる。観音堂は廃仏毀釈の影響で明治初年に解体されるが、昭和に入り再建され、その際に観音菩薩も再び戻っている。



関田観音

いわき市勿来町関田字寺下地内

当観音は徳一が一本の木から像仏した6体目の観音と伝わる。堂宇も観音と同じ大同二年(807)とされる。奈古曾関本尊と称され江戸時代には朱印地25石を認められていた。現在は松山寺が管理しているが、江戸時代には観音堂は現在地ではなく別所があり、観清寺という寺院が別当寺を務めていたが、火災により同寺は廃寺となり、関田観音は松山寺に移っている。



高倉観音

いわき市高倉町字鶴巻地内

大同二年(807)に徳一が千手観音を祀った観音堂と高蔵寺を建立したと伝わる。安永三年(1774)に再建された三重塔は県指定重要文化財。伝説によると、徳一は一本の大木から七体の観音を彫り、当観音はそのうちの一体目と伝わっている。4月下旬から5月上旬にかけては、50万株ものシャガの花が三重塔のある斜面を埋め尽くし、幻想的な光景を見せてくれる。



蛟川観音

いわき市錦町大島地内

同観音堂の本尊は、江戸時代は一寸八分の黄金仏で、真福寺が別当寺として管理していたが、戊辰戦争の戦禍により真福寺は焼け、残った観音堂も明治の泉藩の廃仏毀釈により取り壊されている。明治の末に現在の観音堂が再建され、かつての本尊に代わって聖観音がお祀りされている。

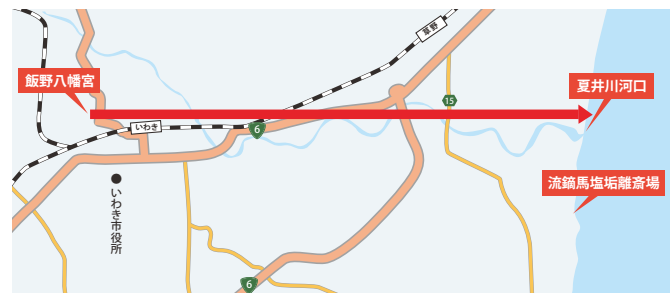
飯野八幡宮

iinohachimangu

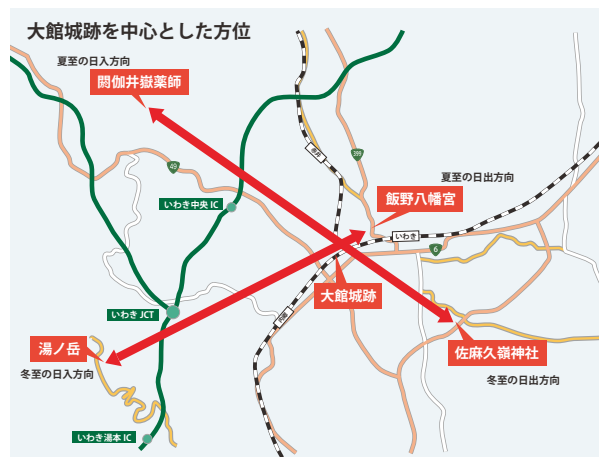
飯野八幡宮は鎌倉の鶴岡八幡宮とほぼ同じ時期に石清水八幡宮を勧請して創建されたと伝えられます。鎌倉の鶴岡八幡宮は、八幡宮を要に東西に聖地を配置して結界とし、その参道は、分霊が上陸した付近に最初に置かれた若宮の方を指しています。飯野八幡宮も平城と東西に並び、



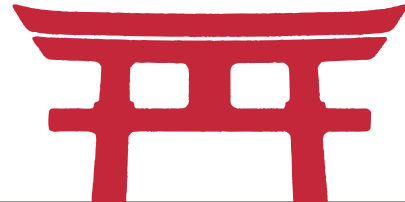
また東西に流れる夏井川の延長上にあって、夏井川河口を東にしていますので、鶴岡八幡宮同様の結界を意識していると考えられます。また、夏井川河口の南に位置する舞子浜には潮垢離の祭祀場がありますが、これも分霊の記憶を再生する場なのかもしれません。



いわき市平字八幡小路84



大館城は、平城築城以前には戦国から岩城氏の居城として、この地方の中心だった。小高い丘の上にある山城跡で、周囲が遠方まで見通せる。図のように、夏至の日の出方向には飯野八幡宮が位置し、冬至の日の出方向は佐麻久嶺神社、冬至の入日方向は湯ノ岳山頂、夏至の入日方向には関伽井嶽(関伽井嶽薬師)と、いわきを象徴するランドマークと合致している。



御宝殿熊野神社
御斎所・奥宮
いわき市錦町御宝殿81
いわき市田人町黒田字大沢25-2



御宝殿熊野神社

gohodenkumanojinja

御斎所・奥宮

gosaisho & okumiya

全国的にも珍しい稚児田楽が伝わる御宝殿熊野神社は、大同二年に熊野新宮大社を勧請して祀ったとされます。鮫川河口にほどちかく、熊野の神が海からやってきたことを彷彿させます。俯瞰してみると、薬王寺-忠教寺(千手観音堂)-飯野八幡宮という平城の鬼門ラインの南西へ延長した上にあたり、忠教寺の鬼門封じに対して、こちらは裏鬼門封じの役割を果たしているとも推定できます。田人の御斎所山をご神体山とし、頂上の奥宮から、七年に一度神輿が御幸します。東日本大震災の際には、御斎所山頂を起点として大きな断層ができましたが、御幸は断層を大地に潜む魔物と考えて、その魔物を鎮めるために行われたのかもしれない。





薬王寺 いわき市四倉町薬王寺塙74(上/写真は八茎寺)



石森観音(忠教寺) いわき市平四ツ波字石森

平城の西にある飯野八幡宮と忠教寺(石森観音)、さらに薬王寺は直線上にぴったり並ぶ。こう見ると、平城の鬼門封じの結界は平城を起点とするのではなく、このラインである可能性が高い。このラインの南西方向への延長上には御宝殿熊野神社もあるので、平城が置かれる以前から結界とされていた可能性もある。



平城中心結界(江戸時代)

薬王寺・八茎薬師

yakuoji & yagukiyakushi

忠教寺・石森観音堂

chukyoji & ishimorikannondo

いわき三大薬師のひとつ八茎薬師は、大同元年(806)に徳一大師が創建したと伝えられています。薬王寺は、その別当寺です。元は背後の山頂近くにあったとされますが、この山は銅や鉄などを産する八茎鉾山で、すでに8世紀初頭には開かれていたともいわれます。いわきというと常磐炭砒の印象が強く、石炭をイメージしますが、周辺の山には鉾物資源が豊富で、古代から鉾山技術を持つ人々が展開していました。彼らは独特の方法で鉾山の場所を伝えたり、結界を張ったりしました。平城創建の際に、その北東方向にある 忠教寺の石森観音が城の鬼門封じに見立てられたと伝えられていますが、それは古代の鉾山技術者たちの技術を援用したのかもしれない。



この図に見られるような螺旋を描く結界は、その中心を守る力が強いとされた。堀とともに戦時には砦の機能を果たす寺社をこのように配置するのは、軍事的にも堅固な守備となった。また、平城から見て飯野八幡宮は春分と秋分の入日方向に当たり、子鉾倉神社は冬至の入日方向に当たる。

平城

lairajo

江戸城は、隅田川から水を引き込んだ外堀を一番外側にして、内堀、さらに天守を守るように渦巻状に堀を巡らせています。平城は、この江戸城の構造によく似ています。外側を夏井川とその支流の好間川と新川が囲み、丹後沢をはじめとする複数の内堀が城を螺旋状に囲むように配置されていました。さらに、城の周囲の寺社をプロットして結んでみると、これも城へ向かって螺旋を描くように配置されています。平城築城以前は、この場所に飯野八幡宮の旧地、あるいは他の何らかの祭祀場があったと伝えられていますが、元々の聖地に寺社による結界を形作ること、さらに強化されたポイントとしたのでしょう。平城の初代藩主鳥居忠政は、徳川家康の側近でしたから、家康の江戸築城の手法を熟知していて、これを平城築城に応用したと考えられます。

結界

聖地は、都市を守り繁栄を願う結界も構成する。
いわきには、時代を越えた様々な結界があり、
そこから秘められた歴史を紐解ける

潮目と結界 いわきを守るモノ

いわきの海は「潮目の海」とも呼ばれます。北から下る親潮と、南から上る黒潮が接する潮の境という意味です。この潮=海流によって、いわきには多くの人が流れ着き、多彩な文化と歴史を育みました。また、江戸時代初期に琉球で仏教の普及に尽くした袋中のように、広い海の彼方を想像するスケールの大きな人物も生み出しました。陸では、東国の蝦夷と大和朝廷が向かい合い、それぞれの文化が入り混じりました。そこには、両者の緊張関係を表す結界の痕跡も見られます。海と陸、それぞれの境にあったいわきならではの土地の雰囲気、それを感じられる聖地を巡ってみましょう。



平城の石垣

いわきの聖地

潮目と結界 いわきを守るモノ

- 潮目
 - カコミ「袋中上人・専称寺」
 - 住吉神社
 - 金刀比羅神社
 - 波立寺
 - 立鉾鹿島神社
- 結界
 - 延喜式内七社
 - 徳一と七観音
 - 飯野八幡宮
 - 御宝殿熊野神社・御斎所・奥宮
 - 薬王寺・八茎薬師・忠教寺・石森観音堂
 - 平城

